

## 第52回 記者懇談会実施概要

1 日 時 平成20年10月27日(月) 15時～

2 場 所 100周年記念会館 第2会議室

### 3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答 (15:00～16:00)

・北波<sup>きたば</sup>道子<sup>みちこ</sup> 経済学部准教授  
発表テーマ「台湾の公営事業とその民営化について」

・ノーマン・D・クック 総合情報学部教授  
発表テーマ「和音とは何か？」

ールネッサンス以来の和音に対する感受性の問題が解けたー」

(2) 上原洋允 理事長挨拶 (16:00～16:10) [資料1](#)

(3) 学内状況説明・情報交換 (16:10～17:00)

① 平成20年度大学教育改革支援事業の採択について [資料2](#)

② トヨタ財団助成事業の採択について [資料3](#)

③ 経済学部国際化プログラムの新設について [資料4](#)

④ 渋沢栄一記念財団寄附講座「日中関係と東アジア」の開催について [資料5](#)

⑤ 第28回「地方の時代」映像祭2008の開催について [資料6](#)

⑥ 客員教授の委嘱について [資料7](#)

⑦ 学園祭の開催について [資料8](#)

⑧ 関大生の活躍について [資料9](#)

### 4 大学側出席者

河田悌一学長、上原洋允理事長、芝井敬司副学長、良永康平学長補佐、  
北波道子経済学部准教授、ノーマン・D・クック総合情報学部教授、  
川上智子商学部准教授、山本英一外国語教育研究機構教授、北川勝彦経済学部教授、  
藤本清高広報室長、木田勝也広報課長、荒堀善文教務センターグループ長 他

### 5 参考資料

(1) 関西大学通信第356号

(2) ぴあかんず No. 3

(3) Volury ボラリー Vol. 7

(4) 経済・政治研究所 第184回公開講座 チラシ

(5) 東西学術研究所 第48回泊園記念講座「東と西 その12」 チラシ

(6) 図書館秋季特別展「目で見ると江戸俳諧の真髓」展覧会目録、講演会チラシ

(7) 関西大学博物館展示会「北摂の文化遺産」 チラシ

(8) 平成19年度 学生生活実態調査報告書

以 上

# 台湾の公営事業とその民営化について

経済学部准教授 北波道子

## 【概要】

世界的な経済自由化の流れの中で、台湾でも1980年代末に公営事業の民営化が開始された。アジアNIESの中では、韓国と台湾の経済発展が比較されることが多い。重工業の大企業、いわゆる財閥（チェボル）を中心とした経済構造がイメージされる韓国に対して、台湾は中小企業が労働集約型の輸出加工業を牽引し、その延長上に現在のIT産業の発展があると考えられている。その説明は概ね正しい。そして、それらの中小企業とは、民間企業である。しかし、台湾経済に占める公営事業の割合は高く、1987年の国内資本形成は20.8%と資本主義国ではノルウェイ（23.1%）に次ぐ大きさであった。（日本は6.2%）

台湾の公営事業には、電気、水道、通信などのいわゆる公益事業以外に、戦後初期に、戦前の日本人資産を接收して再編された旧式で大型の工業と、1970年代に上からの重化学工業化政策の一環として設立された鉄鋼業、石油化学工業、造船業などが含まれていた。また、1991年までは、銀行や主要な金融事業もすべて公営であった。

公営事業の基本コンセプトは、孫文の三民主義の民生主義「国家資本を発展させて、経済建設を促し、人民生活に利すること」にあった。が、国共内戦に破れて台湾に移転してきた国民党政府にとって、公営事業は再出発の大きな元手となっただけでなく、外省人の就業先として、また土地改革の地主への補償として、そして化学肥料などの独占による利益の供給源として重要な役割を果たした。就業という意味では1950年代から退役軍人の就業先として設立された数々の事業体も公営事業とされた。

台湾の公営事業民営化には、労働者の反対やその政治化に加えて、こうした歴史的経緯から派生する特有のハードルが存在し、本研究は、そうしたハードルを研究することによって戦後台湾経済発展を裏側から再検証することを目的としている。

## 【プロフィール】

1968年大阪府生まれ。関西大学経済学部准教授。専門はアジア太平洋経済論。主に台湾、中国といった中華圏の経済発展を研究対象としている。神戸市外国語大学卒業後、企業に就職、台湾での日本語教師などを経て、1996年関西大学大学院経済学研究科に入学。2002年3月、学位（博士（経済学））取得。著書は『後発工業国の経済発展と電力事業—台湾電力の発展と台湾の工業化』（晃洋書房、2003年）、章担当として、堀和夫・中村哲編著『日本資本主義と朝鮮・台湾』（京大出版）第7章「植民地における電源開発と電力需要」、佐藤幸人・竹内孝之編著『陳水扁再選—台湾総統選挙と第二期陳政権の課題』（アジア経済研究所、2004年）第8章「公営事業改革—旧体制の破壊から新しい公共性の創造へ」、石田浩編著『中国農村の構造変動と三農問題』（晃洋書房、2005年）第6章「上海近郊農村の経済発展と家族・家計」など。趣味は子育て。

## 和音とは何か？

ルネッサンス以来の和音に対する感受性の問題が解けた

総合情報学部教授 ノーマン・D・クック

### 【概要】

心理学における最大の謎は、なぜ人間の行動は他の動物とこれほどまで違うのかということである。認知心理学で特に話題になっている人間の特徴は、言語機能、道具使用と芸術（音楽と美術）機能である。われわれ人間は、どのようなプロセスでこれらの高次機能を実現させているのか？私は、30年の間、順番にこれらのテーマを研究してきたが、10年前から、音楽と音声の共通点であるピッチ現象を調べ、1400年代から残っていた最大の和音に関する問題を解いた。その「問題」とは、なぜ短調と長調の和音にそれぞれ特有の響きがあるか？また、なぜ解決感（終止感、安定感）の和音と未解決感の和音があるか？古典的な和音理論でこれらの現象が細かく記述されているが、科学的（音響学的）根拠は今日まで解明されていなかった。

実際に、和音問題の解明は2つの要素からなっている。1つ目は100数年前から研究されてきた「協和感」であり、1960年代に音響学的な「音程の協和性理論」が設立された。2つ目は、1950年代から「音階の不均等のステップ」で話題になったが、最近まで音響学的なモデルになりえなかった。私の貢献はこの2つの要素（2つの音からなる音程および3つの音からなる3和音）を、ごく単純なモデルに合わせて、様々な和音現象を定量的に説明し、実験結果と比較することができたことである。何の処理で、和音を認知できるかという、2音の場合、音程の大きさ（周波数の差）を計算し、3音の場合、和音の対称性（2つの音程の差）を計算する。その結果、短調・長調感と解決・未解決感が分かる。

古典的な和音理論は極端に複雑になるところもあるが、和音認知は簡単である。ほとんどの人は短調・長調や解決感・未解決感の音楽現象が直感的に理解できるし、音楽文化や音楽訓練と関係なく、4歳の子供でも、大体分かる。一言で言えば、和音現象を認知するためには、人間の脳さえあれば、可能であり、従って文化の影響は小さい。

### 【プロフィール】

1949年アメリカ生まれ。関西大学総合情報学部教授。専門は、認知心理学、音楽心理学、神経心理学。プリンストン大学、東北大学、オックスフォード大学、チューリッヒ大学を経て、1994年4月以後、現職。著書は、「Stability and Flexibility」Pergamon, 1980（和訳：「自然のコード」HBJ 東京、1996）、「The Brain Code」Methuen, 1986（和訳：ブレーン・コード、紀伊国屋、1988）、「Tone of Voice and Mind」Benjamins, 2002、「Models of the Atomic Nucleus」Springer, 2006、「The Picture Book of Harmony」Oxford University Press, 2009（予定）。